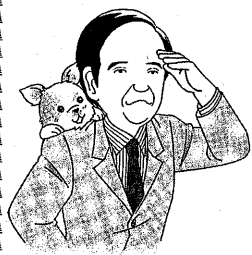


# 霞ヶ関から眺める証券市場の風景



## <第1回> 映画「ウォール街」

金融庁・証券取引等監視委員会事務局次長 大森泰人



**私**は、行政官としてはわりと対外発信するほうだが、いつだって具体的な依頼に応じて書いたり話したりするのであって、自分から積極的に発言したことはない。だから、特定のテーマに絞らない連載の企画はこれまで遠慮してきた。気が変わったのは、現在の私のポストである佐渡委員長から、市場監視活動への理解を深めるパブリック・リレーションをどんどんやってくれと指示され、本誌の今井編集長からは、好きに誌面を使ってくださいとオファーされたからだ。そんなわけで、いつまで続くかわからないが、証券市場をめぐるさまざまな論点を（必ずしも市場監視という視点だけにこだわらず）、綴ってみることにしたい。しばらくは、前号巻頭オピニオン（1882号1頁）に続いてインサイダー取引を採り上げる。というのも、前号で記したように、どんな平凡な人生にも降りかかる可能性がある点で、もっとも身近な不正取引だからだ。

**現**在ニューヨークでは、金融・経済危機に触発されたオリヴァー・ストーン監督が、「ウォール街2」を撮影中で、順調にいけば来春公開の運びだそうである。オリジナルが1987年だから、ずいぶん間が空いたものだが、この映画で描かれたウォール街の体質が、危機以前には真剣に問われなかったことを反映している。私がストーンを好きなのは、なんとといっても前年（1986年）の「プラトーン」に結構、衝撃を受けたからだ。アメリカ人にとって、ベトナム

戦争は意外に大きな心の傷跡を残している。だから、映画の素材として、ジョン・ウェインの戦意高揚ものは論外としても、ベトナムにロシアンルーレットを強要される（ディア・ハンター 1978年）とか、密林の奥深く狂気の大佐の王国を訪れる（地獄の黙示録 1979年）とか、映画としての出来映えはともかく、ベトナム戦争を素直に直視していない。ランボー・シリーズに至っては、こんな作品が存在するせいで、ロッキーのシルベスター・スタローンを見ても素直に感動できないくらいである。ベトナム戦争におけるアメリカ兵の残虐行為を率直に描いた「プラトーン」をアメリカ国民が受け入れるまでには、やはり一定の期間が必要だった。

「ウォール街」のほうは、まさに現在の私たちがイメージするウォール街に変貌を遂げつつあった時期の物語になる。チャーリー・シーン演じる若い証券マン、バドは、マイケル・ダグラス演じる大物乗取り屋ゴードン・ゲッコーに取り入るため、つい、父親のマーティン・シーン（数年前には狂気の大佐の王国に向けベトナムの密林を下っていた）が勤める航空会社のインサイダー情報（墜落事故の原因が航空機メーカーにあり、航空会社に責任はないとの調査結果）を提供してしまう。それが功を奏し、バドは、「情報こそすべて」がモットーのゲッコーの世界に深入りし、インサイダー取引にのめり込んでいく。ゲッコーが、敵対的買収を仕掛けた製紙会社の株主総会に乗り込んで、双子の赤字を

抱え、もはや二流国に落ちぶれたアメリカの現実を直視せよと訴え、役立たずの取締役たちを糾弾し、貪欲（Greed）は善であると言い放ち、貪欲によりアメリカを再生させようと株主に呼びかけるシーンは、ある種の爽快感を伴う。それは、20年近くも後に、村上世彰氏が、「のぼほんとした経営者はクズ！」と叫んだとき、私のなかでは違和感より共感が勝っていた記憶と重なる。「ウォール街」が製作されたころ、日本はバブルの真っ盛りだった。ジャパン・アズ・ナンバーワンと称され、世界の銀行ベストテンを邦銀が独占し、もはやどの国にも学ぶものなどないと日本中が自信満々で思い上がっていたら、いかに株価や地価がファンダメンタルズから乖離しようと気にならない。

**今**回の金融危機の発端となったサブプライムローンの構造が問われている。信用力の低い貧しい人でもローンをつけられれば住宅が持てるから、住宅の実需が高まって値段が上がり、貧しい人でもローンをやりくりできるのは、永続するはずのない自作自演バブルというわけだ。でも、銀行が、不動産担保さえあれば貸し、貸すことにより地価が上がってさらに貸せるからさらに地価が上がり、という自作自演は、80年代後半の日本そのものである。違いといえば、当時の日本には、貸付を銀行から切り離す証券化技術がなかったことだ。このため、バブル崩壊による実体経済のリスクが銀行に集中して資金循環を麻痺させ、失われた90年代以降の停滞の一因となった。一方でアメリカ経済は、かつてのゲッコーの自嘲が昔話に見えるほど、直近に至るまで順調に推移してきた。それが、バブルリレーに基づく脆弱な基盤に支えられていたことは、やはりアメリカ金融帝国の資金循環が崩壊しなければ痛切に自覚されない。

**映**画「ウォール街」に戻ると、バドは、業績低迷が続く父親の航空会社も、ゲッコー流M&Aで再生できるのではないかと考え、かねて親しい労組リーダー

1958年生まれ。1981年東京大学法学部卒業、大蔵省入省。大蔵省証券局市場改革推進室長、金融再生委員会事務局企画官、近畿財務局理財部長、金融庁調査室長兼法務室長、金融庁証券課長、内閣府産業再生機構設立準備室参事官、金融庁市場課長、金融庁参事官兼信用制度参事官、金融庁企画課長を経て、2009年7月より現職。著書に『金融システムを考える—ひとつの行政現場から—』（2007、金融財政事情研究会）がある（なお、表紙のチワワは大森氏の愛犬コロロである）。趣味はヨーロッパ絵画とクラシック鑑賞。フェルメールとプラームスをこよなく愛してやまない。

たちの賛同を得る。ところがゲッコーは、途中から会社を解体して売り払う方針に密かに転換する。これを知ったバドは、怒り心頭、表面上はゲッコーと調子を合わせながらも、労組リーダーたちともども、ゲッコーのライバル乗取り屋に、会社を解体しない形での救済買収を持ちかける。そして、バドの目論見が鮮やかに成功したそのとき、以前のインサイダー取引容疑でSECに逮捕されてしまう。保釈されたバドを、ゲッコーは呼び出してさんざん殴りつける。どうして俺を裏切った、誰のおかげでお前はここまでのし上がってこれた、誰がお前にこの世界のノウハウを教えてやった、あの会社も、この会社も…。そしてそれは、ゲッコーがこれまでの証券犯罪を告白しているに等しい。バドの身体には、SECに盗聴依頼された小型録音機が仕掛けてあった。

**映**画は、見てから時間が経つと、それが映画館だったのか、レンタルDVDだったのか、テレビ放映だったのか記憶が怪しくなってくるが、「ウォール街」の場合、はっきり映画館だったと断言できる。というのは、終了後、隣に座っていた女の子たちの会話が忘れられないからだ。「えー、チャーリーなんて捕まっちゃったんだろ?」、「わかんない、かわいそーお」。アホかこいつら、と内心思うのは、私が大蔵省職員だったからだ。無理もない。当時、日本には、まだインサイダー規制は存在していなかったのである。

（おもり やすひと）